

1月11日（日）主日礼拝レジュメ

「だれを喜ばせ、何を喜びとするか」 使徒の働き 5章33～42節

「これを聞いて、彼らは怒り狂い、使徒たちを殺そうと考えた。」というように最高法院の指導者たちは反応した。彼らは、神が与えようとした、悔い改めをもつての罪の赦しを拒んだ。

ガマリエルという人が「民全体に尊敬されている律法の教師」と紹介されている。彼は、最近起こった出来事を例に出しながら、「この者たちをどう扱うか、よく気をつけてください。」と警告を与えている。ガマリエルは、テウダとガリラヤ人のユダの二つのことを例にあげている。38節で結論としてガマリエルは、「この者たちから手を引き、放っておきなさい。」と言います。なぜなら、この使徒たちの教えや病の癒しの行為が人から出たことであれば、自滅するからです。その一方で39節ではもう一つの結果として、もしそれが神から出たことであれば、彼らを滅ぼすことはできないということです。

40節「使徒たちを呼び入れて、むちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえで、釈放した」とあります。むちで打ったのは、39回のむち打ちのことだろう。これは死の一手手前までの罰を使徒たちは受けたことを意味する。しかし、むちで打たれ、イエスの名によって語ってはならないと命じられたことが、使徒たちには御名のために辱められるに値する者とされたことを意味していて、それが彼らの喜びとなった。苦難を通して主は栄光を現してくださる。

42節「そして毎日、宮や家々でイエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかった。」指導者たちが使徒たちを捕え、むち打ちにしたことは、むしろ使徒たちに喜びを与え、彼らの働きを励まし、力づけること

となりました。それと同時に、使徒たちは働きの中で、神が守っていてくださる、支えていてくださるといふ神への信仰を増し加えた。

神の召しに従って生きるということには、犠牲が伴う。使徒たちも、人に従えば捕えられて最高法院に引き出されて、むち打ちにされることもなかった。私たちが考えるべきことは、誰を喜ばせるかということ。人に従うなら、人を喜ばせ、神に従えば、神を喜ばせることになる。もし自分が苦難を選び取り、苦難を喜べる者となった時に、そのような者へと変えてくださった神を喜びましょう。そして苦しい時、誰も分かってくれなくても、背後で私たちのすべてを知ってくださり、人知れず流す涙をぬぐってくださる主なる神様を自らの喜びとし、人ではなく、自分ではなく、この神様だけを生涯喜ばせつつ、歩める者でありたい。